

現在勤務している阿倍野区の病院に着任する前、京都市の北西に隣接する人口密度は希薄であるが極めて広域な二次医療圏をカバーする唯一の基幹病院（N病院）に、外科部長、副院長として8年間勤務した。外科臨床、消化器がん臨床、救急診療、研修医教育、スタッフとの飲み会（その日はもちろんJRで通勤）、病院運営への関与と、本当に忙しい日々であった。そして、当時の京都市の自宅からN病院まで片道40キロを一人走らせる車内で聞くお気に入りのFM放送とCDのみが、唯一の趣味（？）と言

えるほど無趣味であった。

「あかんあかん。こんなことではいかん。もっと心が解放されるような何か良い趣味見つけんと…。人間がダメになる!?!」「そうや、久しぶりに球場行ってみよう！ 楽しいかも」と思い立ったのが、N病院勤務7年目の春であった。学生時代は父親が南海ホークスファンであった影響を受け、ガラガラの大阪球場に時々野球を見に行っていた。門田やドカベン香川、藤原たちが活躍していた古き良き時代である。よって、生来のパ・リーグファンということで、



医界サロン

京セラドーム大阪に思う

広報委員 上田 祐二

関西で圧倒的な人気を誇る阪神タイガースではなく、オリックスバファローズの応援に京セラドーム大阪に行ってみることにした。自宅から球場へは電車を乗り継いで2時間かかったが、初めてドームに足を踏み入れた時の印象は、鮮烈であった。まず何より、人工芝のグリーンが大変美しい。そして、内野の一部に施されたブラウンのアンツーカーと絶妙な色彩のコントラストを生み出している。その美しいドーム球場に、打撃練習の乾いた硬球音がカンカンと響き渡る。「ああ、来て良かった！ やっぱり生は迫力が違う。これからバファローズ応援するぞ!」。そしてすぐにファンクラブに入会し、熱烈な一ファンとなって7年目である。5年前に阿倍野に転居してからは、休日を中心に年に10回はドームに通っている。

球場では、年齢や性別、社会的な立場等に関係なくファンは皆平等であり、気持ちをひとつにしてバファローズに大きな声援を送り、ナイスプレーには周囲とハイタッチを繰り返す。そして、ドームはあつという間に熱狂と興奮の

つぼと化す。ビール売りの女の子たちも、小さな体に大きなタンクを背負ってとてもかわいい。中には一人で来ているおじさんファンの野球談議に、ビールを売った後にしばし付き合ってくれる気のいい子もいる。この連帯感がたまらない。そしてファンにとって、選手の中にアイドルを作る事はゲームを楽しむ上でとても大切である。今の自分のアイドルは、投手では山岡泰輔選手、野手では吉田正尚選手である。二人とも体は決して大きくないが真に小さな大選手であり、バファローズの投打の主軸である。この原稿を執筆時点ではバファローズは断トツのパ・リーグ最下位であるが、今後この2人の活躍によりシーズン終盤にはクライマックスシリーズ出場を果たしてほしいと考えている（決してぜいたくは望みません）。

甲子園ももちろん良いんですが、京セラドーム大阪も良いですよ。楽しいですよ！ 空調も効いているし雨でゲームが流れることもありません。皆さん、バファローズを応援して大阪をもっともっと盛り上げていきましょう！